

<学びの教室コラム> 「学び・遊び・つなぐ」プロジェクト

中堅教員になって

角田弘枝

教職について24年経ち、中堅教員と呼ばれるようになった。正直なところ、24年間の中で、自分の力のなさに落ち込んで学校に行きたくないと思ったこともあるし、生徒に思いが伝わらず教室から逃げ出したいと思ったこともある。そのような私であるが、この仕事を24年間続けることができたのは、出会ってきた生徒たち、保護者の方々、先生方のおかげだ。感謝しても感謝しきれない。私の24年間を振り返ってみる。

まずは、初任の学校で学んだこと。教諭として採用された初任の学校の先生方からたくさんの事を学ばせていただいた。その一つが「先生も学校を楽しむ」ということだ。当時の取り組みの中で、忘れられない活動の一つがくす玉作りだ。紐を引っ張るとパカッと割れて、垂れ幕と紙吹雪が落ちてくるあのくす玉である。「学級開きの最後にくす玉を割ろう」という学年主任の一言で、私の担任としての仕事は始まった。初任者はもう一人いた。違う学年だったが、いつの間にか、彼女のクラスもくす玉を割ることになっていた。くす玉の丸みを作るコツや、くす玉の中に入れる垂れ幕が上手に落ちてくる技を学年主任をはじめとするほかの先生方も教えてくれた。みんながくす玉作りに必死だった。ようやく、形ができたので、試しに割ってみることにした。くす玉を見つめる数人の先生方。「3・2・1」割れない。なぜ割れないのか、どうすれば割れるのか、それぞれが意見を出し合う。そして、学級開き当日、「このくす玉をみんなで割ります。全員の力で割りましょう。」と言って、くす玉につながっている紐をクラス全員で持った。「3・2・1」もちろん、割れた。生徒たちも大変喜んだ。次の日の生活のノートに「自分たちのためにくす玉を作ってくれたということがうれしかった」と書かれていたことを覚えている。私が初任者として初めて担任したクラスはなんとかスタートすることができた。そして、いつの間にか、私も学校の一員となっていた。初任の学校でのワクワクしたこの出来事は、今でも私の学校生活に影響を与えている。先生方は、私にことばではなく、実際に一緒にやってみるという形で生徒との関わり方、学級開きで大切にすべきことを教えてくださったのだと思う。

その学校では、ある保護者との出会いもあった。離任式の日、クラスで一番元気のいい男の子のお母さんから手紙をいただいた。「一年間大変お世話になり有り難うございました。先生を悩ませる生徒だったと思いますが、息子にとっては、角田先生に出逢えたこと、よい友達と出逢えたこと、今のクラスでの学校生活は毎日が楽しく過ごせた一年になったと思います。たくさんの思い出と先生、友達からいろんな事を学び、少しは成長したかなと親バカですがそう思います。『勉強をもっと頑張って』と言いたい日々でしたが、学校での一日の出来事を話してくれるのを聞いていると、『毎日楽しく学校生活を送っているのだな』と思いました。この前、『二年生も角田先生で、今のクラスのままだいいな』と息子が言ったのを聞いて、本当にこの一年間、息子にとっては楽しい毎日だったのだと嬉しく思い、同じクラスの友達に感謝しています。私も中学時代の楽しかった思い出は今でも心に残っています。息子もこの一年の思い出は生涯心に残る事と思います。これから受験という大きな壁に向かわなければいけません、今の元気すぎる程のパワーを受験に向けてくれればよいのにと願っています。本当に一年間有り難うございました。」15年以上前にいただいたこの手紙は今でも心の支えとなっている。初任の学校で先生方から学び、実践してきたことが生徒にも保護者にも伝わったのだと思う。

しかし、私の教員生活もずっと上手くいった訳ではない。生徒指導で悩んだこともあった。担任として思うように学級経営ができないことがあった。授業も上手くいかず、授業の様子を見に来てくださった校長先生には「授業中にどこを見ながら授業をしているのか?」と言われる程、心ここにあらずというような精神状態だったようだ。そんなときに声を掛けてくださったのが、先輩の先生だった。私の側で、私の思いを聞いてくださ

った。また、管理職の先生に何とかならないかと掛け合ってくださいと、後で知った。先生方だけでなく、保護者の中にも励ましてくださる方、そして、生徒に励まされることもあった。PTAの集まりのときに「遠慮せずにできることがあったら言ってください。」と仰ってくださる保護者の方。終学活が終わって教室を掃除していると、「先生一緒に掃除するよ。」と仰って一緒に掃除や机椅子の整頓をしてくれる生徒。本当にありがたかった。どれだけ助けられたか。今でも忘れられない。そして、自分もこの先生方や保護者、生徒たちのように、優しく声を掛けたり、励ましたりできる人になりたいと思った。

そして、7年前、現在勤務している学校に赴任した。校長先生から、「10年後、先輩の先生はいなくなっている。今すべきことは何か？」と毎日のように言われた。そんな中で、あるプロジェクトが立ち上がった。若手で学校を盛り上げるプロジェクト。中堅の先生の中の一人がリーダーとなり、学校をよくするためにどうすればよいか考えていこうというものだった。若手・中堅教員10名弱で意見を出し合った。実際にその中で話し合ったことが現実になったこともあったが、残念ながら学校全体で反対意見が出て実現しなかったこともあった。しかし、初任の学校でのくす玉のときと同じように、ワクワクした。他にもたくさん学んだことがある。教科の枠を超えて、授業のアドバイスをしたり、授業に関わったりすること。職員室で生徒の情報交換もたくさん行った。良情報の交換だ。学年を超えて運動会や文化祭に同じ取り組みをしていくことも自然と行っていた。みんなと一緒に取り組んでいるという感じが本当にあった。

生徒は先生の姿を見ている。先生自身の姿はもちろん、生徒と先生との関わり、先生と先生との関わりなども含めてである。楽しそうにしている姿、前向きに頑張る姿、励まし合う姿、アドバイスする姿、何事にも誠実な姿など、身近な大人の姿を見ることで、周りの人との関わり方や人としてあるべき姿を学ぶことができるであろう。24年間で関わった方々が私に示してくれたように、生徒たちや後輩の先生方によい姿を見せられるような教員でありたいと思う。

角田弘枝（鳥取市立中ノ郷中学校教諭）※「学びの教室」講師